

〔千載和歌集春〕右大臣に侍ける時家に歌合し侍りけるに霞の歌とてよみ侍ける、

攝政前右大臣

霞しく春のしほ。路を見渡せばみどりを分る沖つしら浪

〔源平盛衰記 四十、三〕源平侍遠矢附成良返忠事

判官源義經ハ軍負色ニ見エケレバ、鹽瀨ノ水ニ口ヲ漱、目ヲ塞テ合掌、八幡大菩薩ヲ祈念シ奉、

〔玉葉和歌集八〕題しらす

大江忠成朝臣

なるみがた鹽せの波にいそぐらし浦のはまぢにかゝる旅人

〔太平記 十六〕兵庫海陸寄手事

鹽路遙ニ見渡セバ、取梶面梶ニ搔楯搔テ、艦舳ニ旗ヲ立タル數萬ノ兵船、順風ニ帆ヲゾ舉タリケル、

〔鹿苑院殿嚴島詣記〕六日康應元年三月御舟いで、中まゐのす、つちのとなとゞいひて、かたき所々、

いまぞとをらせ給、此所はしほのかなたこなたに行ちがふめり、宇治の早瀬などのやうなり、しほの落合て、みなはしろく流れあひて、しほさい早くのぼればくだるなり、稻舟ならましかば、さほとりあへじかしとみゆ、つちのといふは、大づち、こづちとて、島山ふたつ北南にならびたるあはひをとをるせとなるべし、早しほにをし落されじと、舟子ども聲をほにあげて、こぎなめた

〔八丈島筆記〕八丈の渡海は至て險難にて、凡日本より渡る所、中華、朝鮮、琉球、および壹岐、對馬、佐渡、松前、何れも易すからずと雖も、八丈島を以第一とす、豆州下田より巳午の間に當り、百里と雖へども定かならず、先三宅島に渡り、此風にてはたやすかるべしといふほどの日和を待得ざれば、船出さず、三宅島よりは未にあたりて五六拾里といふ、此間に早潮、黒潮の來る方、二段三段とな